ブラック ゴット

與昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラック　ゴット

【Ｎコード】
Ｎ１６２４Ｉ

【作者名】
與昂

【あらすじ】
極々普通に育ってきた宮代（みやしろ）　徒張（とばり）１６歳は平凡に暮らしてきた少年だ
だが、徒張には普通ではない力があった。それは幽霊が見える事であった
過去にはそのことで虐められたこともあったが、今では普通の少年として生きている。
そんなある日のこと、いつも通りに帰っていた徒張の前にとある洋館が

その洋館に足を踏み入れたことで徒張の運命を一変させた。

最初（前書き）

この話はＢＬがあります
ＢＬが何か分からない　知っていても免疫がない
そういう方はすぐに引き返した方がいいかもしれません
ご観覧の後の苦情は一切お受け取りしませんので重々承知でお願いします

最初

記憶(ぜんせ)　過去(ささえ)　未来(だんぜつ)　現在(かなめ)

それが雁字搦めに繋ぎ合わさって今の私たちがいる
暗黒(ようすい)の中で蠢き始めているのは
神(てんし)　か　邪神(あくま)　か
黄昏の者の様に分かる訳がない

始まり―さいしょ―

普通に生まれ普通に育ってきたオレは宮代(みやしろ)　徒張(とばり)特に家庭に問題がある訳でもなく友達関係も上々と言ったところである
でもそんなオレにも普通ではないところがある。それは何かというと
所謂”幽霊”が見えるっていうもの
幼いころから見えていたからそれが普通なのかと思ったらそうではないようで、両親にその事を話したらいつも優しい微笑みを浮かべている母の顔が歪んだのを今でも覚えている

友達にもそれを話したことがあるけど、それからというものオレはクラスの虐めの的になっていた。
そんなことも多々ありながら、オレは学校を転向して今の街　金倉市という小さな市に移り住んだ。オレの昔の過去や能力を知らない人々と暮らすのはとても楽だった。
今では普通の高校生として極々普通な生活を送っている。幸せな毎日極々普通とは言えないか、だってほぼ毎日見ているモノがあるし、それを抜きにすれば幸せな毎日

「ごめん、今日用事があるから先に帰ってて」

黒髪と地毛の少し茶色のメッシュがあって優等生がかける黒ぶち眼鏡をかけて傍から見れば真面目な少年。顔も整っていてきりっとした瞳が特徴的
高校に来てから知り合った、今ではオレの親友である鈴木（すずき）　水色（みずいろ）。
学級で有名な優等生君で、生徒会のメンバーでもある。
オレは小さく頷いて水色に手を振った後、自分の家に帰る為足を靴箱に向けた。

＊　＊

オレの近所は空き地などが多くそこの殆どが売りに出されている場所である。極々たまにではあるがお金持ちかなんかが、別荘を建てたりする程敷地は広いものであった。
ここの区は道が入り組んでおりそこのどの道もが色々な場所に繋がっていて狭い区でもあるので、オレがいつも知っている場所に出るなので毎日、色々な道を通って自分の家にたどり着くことがオレの毎日の楽しみでもある。そして今日は新しい道を発見

好奇心旺盛なオレはその少し細めで暗い路地裏に足を向けた。2、3分歩くとオレがまったく知らない場所に出てしまった。普通なら何時も知っている道にでてくるはずなのに
オレの目の前にはまるで、どこかの古めかしい英国の洋館の様な美しい建物。装飾がこっていてそこら変に建っている別荘とは比べ物にならない
「凄いっ…」
思った事がつい声に出てしまった。それぐらい凄い洋館で、絶対にお金持ちイヤ、大富豪が作ったものだとオレは確信した。
オレの足は無意識に動いていて漆黒のドアのノックする部分に手を伸ばしていて、これもオレの意志なの？でも今オレは、確実にその部分に手を伸ばして掴んで

コンコン

ノックまでしてしまった。不気味な音をたてて開かれたドアにオレは一歩、この洋館に足を踏み入れていた。これは不法侵入ということにはならないだろうか
訴えられてしまえばそれまでで、コツコツとオレの足音だけが廊下に響いていく。真っ赤なカーペットに奥行きのある壁
最近建てられた屋敷とは思えない程古い。一方通行で進んでいくと目の前には漆黒の扉がある、デザインもこっていてこの家にぴったりだと思う
オレは何の躊躇もなくその漆黒の扉を開けた。夕方の光が差し込んで椅子に座っている男の子を美しく照らし出して幻想的だ。

「ようこそ、迷える人間（こひつじ）」
「えっ」
「人間（こひつじ）は、どんな欲望（ねがい）を叶えて欲しい？」

漆黒でショートの髪、青色の瞳は少しだけつり上がっていて口元は綺麗な弧を描いている。服装もどこかのお坊ちゃんが着ていそいな服で整えてあった。
真っ白な肌がキラキラ夕日に煌めいてとっても綺麗。見た目は子供でも中身までは違うらしいことは、その口ぶりからでも想像はできた。
睫毛の長い瞳が2、3度瞬きすると、興味がなくなったのように急に伏せがちにだけどそこには、苛立ちを含ませながらオレを睨む

「なんだお前、欲望(ねがい)がないのか」

言い切った言葉だ。まるでオレの心を見透かしてるような物言いにビクリとオレの肩が揺れた。その青い瞳はもしかして全てを分かっているような気がして
だが次の瞬間、急にネクタイを引っ張られ少年の鼻がオレの鼻につくかつかないかぐらいの距離になった。
そして次の瞬間に、また少年の瞳はつり上がり口は弧を描く、そしてオレの動揺も気にせず言葉を紡ぐ

「そうか、お前。見えるのか」
「なっ…」
「その瞳は見(シキ)える眼の目だ。」

いきなりオレのネクタイを離すのでオレはその場に尻もちをつく。無様な姿だと自分でも分かるが、少年はにこやかにオレに嗤いかけていた。その笑いはオレにとって笑えるものだのだろう？
答えは否。絶対に笑えることではない、次の瞬間オレの胸に勢いよく靴で踏みつけた。靴も高級そうなもので黒光りしているって、呑気にそんなことを考えている暇なんてない
その恍惚に満ちた少年の微笑みは、オレの脳裏に厭なほど焼きつき、

そしてオレに嫌な予感しかさせない

「お前、ボクの下僕になれ」

「はっ、はぁぁぁあぁぁ！？」

いったい何を言い出すかと思えば少年の微笑みはまるで新しい玩具を与えられた子供の様な笑顔で普通なら、子供好きであるオレなら微笑みを零してしまうであろうが

今はそういうことを言ってる暇はない、下僕なんて普通の子供からでる言葉じゃないし、しかも自分になれと言ってる時点で可笑しいすぐに少年をどかそうとするが体が少年の力によってビクともしない。まるで子供ではないような力だ。

「見(シキ)える眼を持つ人間はとても珍しい、だからボクの下僕になることを許してやろう」

「なっ、…自分が何言ってるのか分かってるの！？」

「なんだ、人間(おまえら)は、自分の言葉すら分からないのか？」

蔑んだ瞳がオレを見下す。その物言いはまるで自分がこの世の人間ではないような言い方だ。少年はオレから足をどけるとネクタイを無理やり引っ張った。

それに、さっきから見(シキ)える眼ってなんなんだ？それに、さっきオレが見えるって言った。もしかしたらオレのこの目の事を分かったってこと？

自分から湧き出る疑問は今にも体から吹き出そうで、自分が今置かれている状況もあまり飲み込めないのに。少年はまた次の言葉を紡ごうとしていた。

「ボクの名前は彩花(あやはな)。これから、お前の主人になる者だ。」

その笑顔は

邪悪な天使の様な微笑み

最初（後書き）

ご観覧いただきありがとうございます！
まだまだ未熟な私ではございますがよろしくお願いします

誓約（前書き）

この話はＢＬです。
ＢＬが何か分からない　知っていても免疫がない
そういう方はすぐに引き返した方がいいかもしれません
ご観覧の後の苦情は一切お受け取りしませんので重々承知でお願いします。

今回は男同士のキスがあります。それも踏まえて読まれてください
ＢＬはいいけどキスは…っという人達はお引き返しになったほうがよろしいかと思います。

下僕宣言を受けたオレは今どうすればいいのか、必死に考えていた。
どうやったらこの状況を打開できるのかを

「えっと、あのね…ッ、そういう遊びはよそでやってね？」

優し眼な口調で語りかけると彩花とう少年はスッと瞳を細くしてパッとネクタイを離した。今度は同じことの繰り返しにならないようにバランスを取ったおかげで尻もちをつくなどという無様な恰好にならなくてすんだ。
だけど未だ危機には変わりがない。少年の目がかなりの苛立ちをこめているのは誰にでも分かったし、その原因はオレなんだってこともすぐに分かった。多分子供扱いされたことに苛立ちを感じているのだろう

「お前、このボクを子供扱いしてただで済むと思うなよ…この下僕風情が！！」
「だから！オレは下僕になんてならないから！！」

話が噛みあっていない。もうこれ以上話しても無駄だと思うのでオレはこの場から退散することに決めただが、一向に体が動かない。

可笑しいな、なんで動かないんだろう。そうだこの感覚はこの洋館に入ったときと同じ感覚だ。
自分の意思じゃないんだけど、金縛りってわかでもなくて。本当にオレがこの突っ立ってるを望んでいるようなそんな感じ、言葉ではそれ以上で言い表せられないが。どうか理解してほしい

「まったく、見(シキ)える眼だから優しく扱ってやったものの…こんな口を慎むこともしらない下界のものだったとはな」
「なっ、なに…言って」
「まあいい。これから調教すればいい話しだ。」

こんな子供の言葉から発していい単語じゃない単語が口から飛び出していく。まるでオレより大人の様な言葉遣いとそれと裏腹の子供的思考。自分が欲しいと願ったら必ず手に入れるという欲望(ねがい)が入り混ざったような声
オレの反抗的な瞳に少し眉を顰めながら彩花はいい事を思い突いたように無邪気と小悪魔の中間地点ぐらいの微笑みでオレに笑いかけた。

「では、そうだな。お前がボクの下僕になるというのなら…貴様の目…見(シキ)える眼のことを教えてやってもいい。あわよくば、ボクにちゃんと尽くす事が出来たなら、その見(シキ)える眼を取り払ってやってもいいぞ。どうだ優しいだろ?」

優しいくもなんにもない言葉にオレは息を飲んだ。でもその悪魔の様な言葉にオレの心はかなり揺れ動いていた。オレのこの目の事をよく知っているような素振りとなにより一発でオレの能力を分かったこと
オカルト的なモノを否定することができないオレにとってはその見(シキ)える眼の事が気になってしょうがないのだ。自分の能力の事はよく

知っておきたいのも事実だし、なにより彩花の最後の言葉にだって甘い誘惑さへ感じたのも事実
この能力を無くしてくれるっというその誘惑はオレにとって願ってもいないチャンスでもあった。彩花が言っていることが嘘である可能性も十分高いわけだが、オレはそんな１％にも満たない可能性を信じたくてしょうがない
こんな能力がなくなれば――――きっと、今まで以上に普通に近づけるはずだから

「どうやら決意は固まったらしいな。お前の答えを聞かせてもらおうか？」
「オレ…の、答えは――――」

もうオレの答えは決まっていた。オレは１％にも満たない可能性を信じることにした。たとえこの少年が嘘をついていようと今はそれでも構わない。それが今の硬直状態を打開する方法になるなら

「――――キミの、下僕になる。」

その答えを聞いた瞬間少年…彩花は、笑顔を誇らしげに咲かせながら、クルリを翻った。まるでダンスでも踊っているかのようなそんなかろやかなターンをきめてたかと思うと高級そうな黒色の机に飛び座った。
笑顔はさっきの様な無邪気と小悪魔の中間地点である笑顔を浮かべながら、首を少し横にかしげてまるで”おねだり”をする為の小細工のような真似をする。だがそれはような、ではなく”おねだり”をするための小細工だということはすぐに理解できる

「でわ、誓約の証をしよう」
「誓約の証？」

「そうだ。お前が主人を間違わないように、証を刻むんだ。」

するとまた自分の意志ではなく体が勝手に前に動き彩花に近づいていく。誓約の証、どんなことをするのだろうか。痛い事じゃない方がオレにとって嬉しいのだが、すると彩花は自分の指先を少しだけ切りつけ血を出す

驚いて声をかけようとすると彩花はその指先を自分の口の中に入れて血を少しだけ吸うとオレのネクタイを引っ張った。そしてふにゃりとした感覚が最初に襲ってきた。一瞬何が起こっているかさっぱり分からなくて、目を白黒させるしかオレにはできなかったけど

次の瞬間オレは何をされているのかすぐに分かった。スルリと入り込んできた舌に急いで体を離そうともがくがまたもやオレより細い腕に力で負けてしまう。するとその舌の味は少しだけ鉄分の味がした。

「ッッ…！、い…や！！」

「———汝、今ここに我の僕（げぼく）になることを望まんと理の扉をあける血の契約書　真理の鍵　人生の終始

すべてを我に捧げ我と通ずることをここに今に誓約する———。」

次の瞬間にオレの脳裏に入り込んでくる色々なモノにオレは涙を流す。何故涙を流すのかオレにも分からなかったけどあまりにも大量の情報はきっとすべて悲しいことに違いない事はすぐに理解できた。それが、自分の記憶か彩花の記憶かは定かではないけれど

きっとこれは、誰にも知られたくない過去と誰かに分かってほしい悲しみの情報なんだとオレは頭の片隅で少し霞みかけている意識の中思った。

「――ッ、はっ…」

やっと解放される唇にオレはさっきの哀しみの涙と生理的な涙を零した。でもそんなオレには構わず静かに瞳を閉じている彩花は言葉を一つも吐き出さない。それよりなんであんなにキスが巧いんだよ！！子供のくせして！！

しかもファーストキスが男でしかも子供で…また生理的な涙が零れそうになるのを必死でこらえながら彩花を睨みつけると、彩花はそっと静かに瞳を開く。その長い睫毛がフルリと揺れる様はフランス人形の様なのだが、そんなことを言ったら絶対に怒られるだろう。

「――今、お前の記憶はボクへと通じた。これで、誓約完了だな」

「なっなっなっなっ、何が誓約完了だよ！！オレの、オレの…ファーストキスを返せえェェェ！！」

「はっ、キスもした事が無かったのか。悲しい男だな。まあ、いいこれから女になんてする必要はないからな」

「はっ？」

今度は全て悪意を詰め込んだような微笑みでオレに笑いかける。オレは嫌な予感をさせ耳を塞ぎたくなったがきっとそんな事は絶対に許してくれないし、もし逆らったらオレの１％にもみたない希望を捨てられるかもしれない

それに――、オレのファーストキスさへ無駄になるなんて、嫌だ。

「これからは、ボクだけに尽くすんだろ？下僕（おもちゃ）」

きっとオレはコイツから逃げられない。そう悟った最初の出来事だった。

誓約（後書き）

誓約のお話、一人で勝手に書いてるときに盛り上がってました。
彩花に押され押され最後には飲まれていってしまうような徒張を書いていて物凄く楽しかったです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1624i/

ブラック ゴット

2010年10月13日02時18分発行